

# 96夏、97春 中国女文字調査報告

Report on Women's Script in China:  
Summer 1996 & Spring 1997

遠藤 織枝

本誌(10-1)「96春 中国女字現地報告」以後の2度の調査の報告をする。1度は1996年8月27日～9月5日(以下「96夏」と略記する)で、もう一度は、1997年4月27日～5月5日(以下「97春」と略記する)である。新たな伝承者と、文字資料の発掘を旨として伝播地域(図1)の村々を訪ね歩き、今までに約70か村、延べにして約100か村に足を踏み入れた。村長や村の古老たちにその村の女文字の状況を尋ねて、概況の把握に努めている。この方法では漏れがあるし、完全なものとはいえない。しかし、96春の調査票による調査も徹底して行えなかったため、この地の調査は何度も足を運ぶ以外にないと思うにいたっている。

過去4年、6回の調査で、新たな伝承者は今後おそらく現われまい、後継者は育っていない、文字資料はまだ探し出せるだろう、などのことがわかってきている。

キーワード：女文字の現状、伝播の範囲、継承の可能性、三朝書の発掘、三朝書の変種

## 1. 調査の経過と概要

93年夏、最初の現地調査では、中国のこの文字研究の第一人者である、清華大学の趙麗明副教授に同行を依頼し、女文字の伝承者である陽煥宜さんと、地元の研究者周碩沂さんへのインタビューを行い、また、91年没した、すぐれた伝承者であった義年華さんの家を訪ね、義さんのことを家族から聞くなど、女文字の概要を知ることに努めた。

94年夏も、趙麗明さんの同行を求め、さらに詳細に伝承の状況を調べようとした。このとき、何艶新さんという、少女期に祖母から女文字を習っ

た1940年生まれ女性の存在を知った。

95年夏は、伝播範囲を知るため伝播中心地とされる江永県上江墟鎮に隣接する江華県の調査を行った。60年代に陶墟鎮で女文字を見た、という県の民族委員会委員や、元小学校教師の話聞いて、その地を調べたが、女文字資料は発見できなかった。

96年春は、江永県外事弁公室主任の力を借りて、村の指導者による村人への聞き取り調査を行った（本誌10-1に報告）。各村に、女文字を読み書きできる人がいるか、女文字の書かれた何らかの資料を持っているか、女文字のできる人を知っているかを、村単位で全村人を対象に調査したいと考えた。しかし、この調査は不徹底にしか行えず、4か村の村人の「文化程度」（中国語で教育、識字非識字などの程度を示す）を知り得たにとどまった。

96年夏は、「96春」の反省の上に、村々の残存状況を徹底的に調べるには、自分たちの手と足で各村に出向いて、村の古老たちひとりひとりに尋ねる以外にない、とわかり、調査者を大量に増やした。すなわち、北京大学日本語科の教師、学生、院生7人の協力を求め、4つのグループに分かれて村々へ散った。ききとる項目は（本誌10-1）に示した調査表に従った。その結果33か村に足を踏み入れることができ、解放後の50年代にも女文字を習った人がいることがわかった。

97年春は、96年夏にひきつづき、未踏査の村々へ足を入れた。このため北京大生、院生、華僑大学日本語教師の協力を求めた。

以上の6回の調査で、実際に足を踏み入れた村々で聞き取りをして、わかったことがらを、村別に報告していく。地図（図2）に沿って、北から南へ村々の様子を記す（村名のあとに、訪問した時期を示す）。多くの人に尋ねたが、その中で、女文字習得、伝播、残存に関する情報の部分だけを報告する。

なお、96春までの調査については、遠藤（1993、1994 a. b、1995 a. b. c、1996 a. b. c）に報告している。

## 2. 残存状況（図2）

### 2-1 上江墟鎮（93年当時は上江墟郷）

#### ①桐口村（93夏、96春、96夏）

91年に亡くなった義年華さんが晩年住んだ村なので、義さんの女文字との関わりを知り、義さんが亡くなる前年に郷政府が開いた女文字学習班での後継者育成の成果を調べるため3度訪れている。

義さんの晩年の住居の隣人・蔣漢池さん（96春、75歳）の話では、義さんは29歳で夫と死別、てん足で外で働けないので、刺繍で生計を立てていたという。70歳以上になってから女文字をよく書いていた。扇子にもノートにも細い筆で書いていた。聡明だったから村人に好かれていたが、訪ねてきた人はあまりに貧しいので涙を流していた。アメリカ人が半年ほど一緒に暮したことがある<sup>(注1)</sup>、そのアメリカ人が帰るとき、連れて帰りたと言ったほどだった。

義さんの女文字学習班は、村の書記盧秀増さんによると、後継者を養うため、県が郷に指導して、県と郷が共同で開いた。義年華さんの最晩年、1期を1年として<sup>(注2)</sup>3期まで開いたが、3期目の途中で義年華さんが死亡、その時点で中断したまま以後再開されることはなかった。

この学習班で女文字を習った娘の1人盧蘭珠さん（96夏、27歳）の話では、義年華さんはまず歌を1句歌い、それを黒板に書いた。学習者たちはそれを見て紙に書いた。そうして1句ずつ習った。義年華さんの死で3カ月しか習わなかったから習得できなかった。個々の文字とその音を習ったのではないから、歌の句以外は書けなかった。

もう1人、盧早珍さん（96春、23歳）は、郷政府に勧められて習い始め1か月だけ習った。毎晩食事後に習った。漢字と同じように、先生が黒板に書いたものをまねて写した。写してから歌った。1句1句書いて1句1句覚えた。そして1つ1つの句の意味を教わった。漢字に似ているものが多いから覚えやすかった。しかし、漢字のように1字1字教えたのではない。習った歌は、皇帝が妃を選んだとかどうとかという内容のもので、古

图1 女文字伝播地域概略图

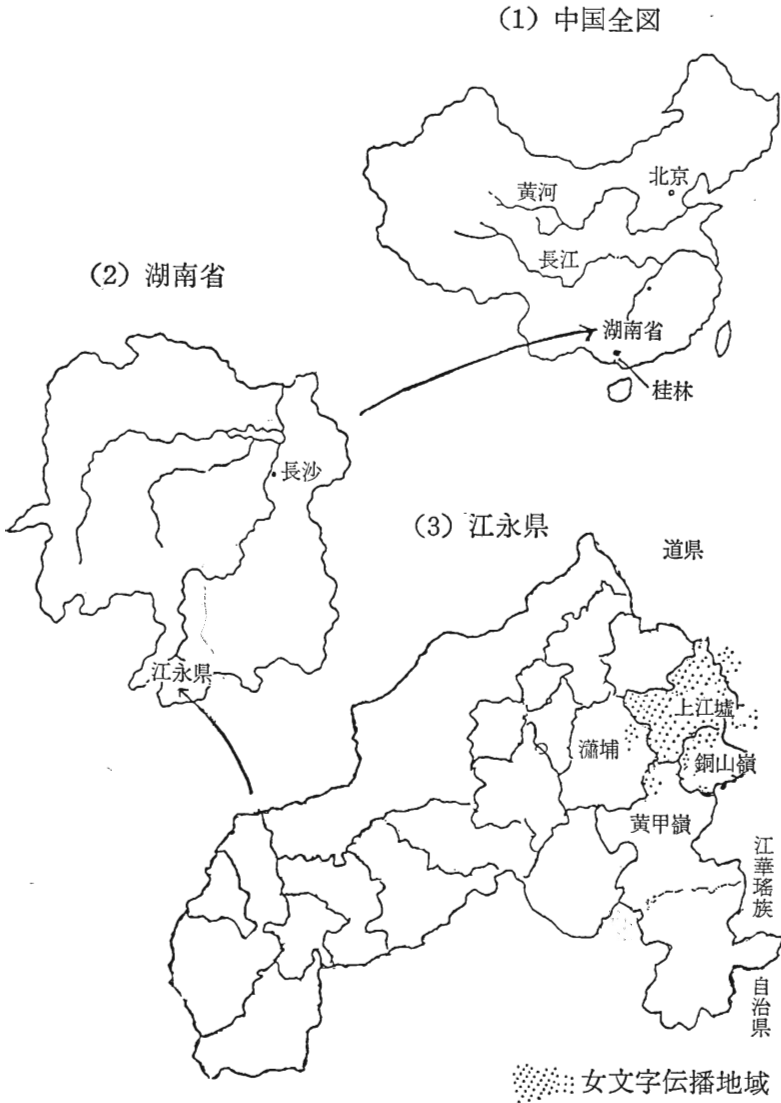
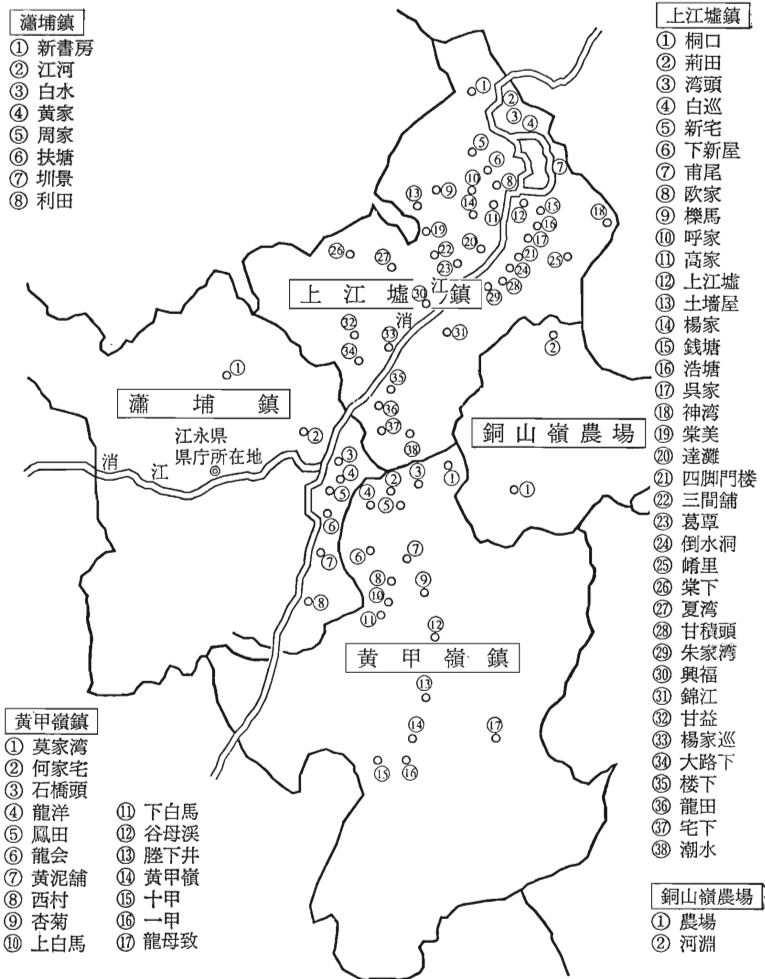


図2 '93夏~'97春 調査地域



くてつまらなかった。

義さんの教えるときの順序について、盧蘭珠さんと盧早珍さんの間にずれがある。かつて習った人からの聞きとりで、まず歌って次に書く、という順序の人がほとんどであるから、盧蘭珠さんの方の記憶が正しいと思われる。

後継者育成をめざして組織された学習班であったが、結局、後継者は育たなかったようだ。

現在、義年華さんに習った、女文字を織り込んだ花帯を織れる人はいるが、1つのパターンの女文字を織り込めるだけで、図案の一種として用いているにすぎない。

## ② 荆田村（94夏、97夏）

女文字創成の伝説の主人公胡玉秀（胡秀英とも呼ばれる。遠藤注）の生まれたという村で、玉秀の住んでいたという家の門や敷石は明代のもんとされる。

わたしたち調査グループをもの珍しそうに取り囲む、男性の1人にきいたところでは、60年代までこの旧居の門に皇帝の名の扁額がかかっていたという。金印が捺してあったから皇帝からのものに間違いないともいう。また別の男性に、この胡玉秀とはどういう女性かと尋ねたところ、美貌と才能を備え、女文字が書けたから皇帝に召された、という。従来の研究者の収集した伝説<sup>(註3)</sup>では、類ない美貌と聡明さで皇帝に召されたが、皇帝の寵を得られず、その苦悩を家族に伝えるために秘密の文字を作った、というのが通説であるが、この男性は女文字の能力を皇帝に召された理由と考えていた。

## ③ 湾頭村（97春）

村の最高齢の女性の話では、姑が読めたとし書けた。姑は漢族で、崑里出身、18～19年前80歳で死去。姑が三朝書（結婚した娘に、式の3日後に贈る冊子。遠藤注）を持っていたが、姑が亡くなったとき姑と一緒に焼いた<sup>(註4)</sup>。姑は義年華さん、高銀仙さん（後述）と3人で義理の姉妹の関係一

この地では結拜姐妹、結交姉妹という一を結んでいた。

#### ④白巡村（97春）

38歳の男性の話。母親が三朝書をもっていたが、15年前、70何歳かで死んだとき、一緒に焼いた。母は葛覃出身であった。母は女文字を読むことも書くこともできなかった。

義桂仙さん（85歳）。興福村出身。娘のころ習いかけたが、覚えられなかった。娘々廟<sup>(註5)</sup>へ行って線香をあげると、女文字を書いた紙をくれた。その紙をもらって帰って、それを見ながら練習したが、覚えられなくて途中でやめた。

女文字ができる人は、自分の願いごとなどを書いて奉納した。書けない人は奉納できず、書ける人が羨ましかった。娘のころ、父や兄弟が病気で、野良仕事をしなければいけなくて、女文字を練習する時間がなかった。

村に1人未亡人がいて、よく書けた。新宅村にもできる人がいたが死んだ。義早早（後述）を知っている。女文字を書いているのを見たことがある。浩塘村へ嫁いだ蔣彩芝がよく書けたが、もう死んだ。

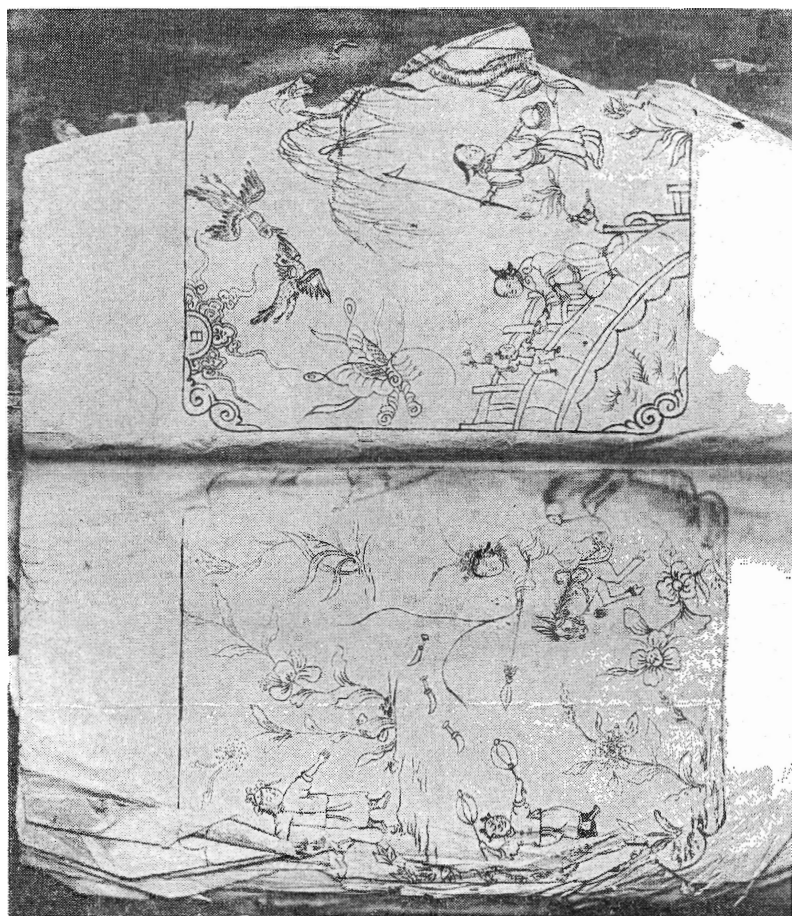
三朝書は4年前北京から来た学者に貸した。これは、嫁に来るとき、村の仲よしの娘にもらった。読めないけど、とてもうれしかった。友だちが結婚するときは、自分が書けないから義早早に書いてもらって、それをあげた。

義雄色さん（70歳以上）。興福出身。三朝書はなくした。歌はうたえる。娘のとき、みんな集まると歌った。人を訪ねるときの歌、老同<sup>(註6)</sup>の歌、寡婦の歌など民歌が歌える。

高齢の女性の話を聞いているうち、集まってきた村人の1人、40代の女性が、三朝書の体裁で、中は女文字は書かれず、絵だけが描かれているかなり古く紙もすり切れふちはボロボロに朽ちたものを見せてくれた(図3)。自分の母が、その母のものだと言って持っていたもので、母も亡くなっているから、だれが、何のために作ったものか何も知らないという。

絵の中には、当地の女性たちが伝統的に描いてきた刺繍の図案とともに、

図3 絵だけの三朝書





孫悟空が桃を盗むところ、宋代の女性英雄穆桂英の闘いのシーン、白蛇伝の主人公が橋で恋人と出会う場面など、故事や小説の名場面が24ページにわたって描かれている。細かい筆致はかなり専門的に描く人のものと思われるが、その反面、人物や動物の表情、手の描き方には専門家らしくない稚拙さも見られる。図の中の旗の中に1箇所、筆記用具らしきものを集めて描いたページに1箇所、文字が書かれている。旗の中の字は左から「衆和團一」と読める。もう1箇所のは文字らしきものではあるが、特定できるものではない。その中に女文字らしきものも2字見られるが、三朝書に書かれたような筆跡ではなく、女文字と意識して書かれたものとは思われない。

他の多くの刺繍の図案はこの地の女性たちの刺繍作品と一致する伝統的なものであり、同様の図案を描いた紙は他の村の女性たちも持っているから、これらの図の多くが女性が描いたものであることも明らかである。

物語場面や、故事をふまえて美しく描かれた絵は、当時の娯楽の1種としてもはやされ、楽しまれたものであろう。絵ばかりの「三朝書」は、女文字資料を1950年代から収集している周碩沂さんも見たことがないという。したがって、その作者、制作意図、用途など全く見当がつかない。ただ、三朝書と大きさ、黒い布の表紙、右の上下の角の赤い布、綴じ方など体裁は全く同じであることから、女文字を書く三朝書の一つのヴァリエーションとみることはできるし、精密で華麗に描かれた刺繍の図案からは、この地の女性たちの「女紅」<sup>(注7)</sup>と密接な関連をもつものであることが確信できる。

#### ⑤新宅村（96夏、97春）

義年華さんの長女盧全玉さん（96夏、67歳）の話。女文字を読むことも書くこともできない。三朝書など女文字資料は何も持っていない。役に立たないから、母からも習わなかった。妹（義年華さんの二女）は二年前亡くなったが、その息子は祖母の義年華から女文字を習って少し書ける。1人は桐口に、1人は双牌県水庫に勤めている。

97春の調査で、村の入口に休んでいた男性たち（50、60代）の話では、村に読み書きできる人はいない。桐口の人（義年華さんのことであろう。遠藤注）が書けた、その人の孫がこの村にいるということであった。

村の中で、80歳くらいの女性にきくと、自分は読み書きもできず、何の資料も持っていないが、甫尾の人（高銀仙さんのことであろう。遠藤注）ができた、とのこと。

#### ⑥下新屋村（96夏）

村人に紹介された、村で最古老の85歳の陳玉登さんも、次いで高齢の76歳の陳全池さんも、女文字のことは何も知らなかった。

#### ⑦甫尾村（94夏、96春、96夏、97春）

高銀仙さんがいた村なので、たびたび訪ねていて、息子の胡錫仁さんから聞いた話は遠藤（1996 a）に報告している。

胡さんは、母が晩年に女文字を書いた絹の布、扇子、ハンカチ、花帯<sup>(註8)</sup>を保存している。また、胡さんの娘（高銀仙さんの孫娘）の胡美月さん（夏湾村）は高銀仙さんから女文字を習ったことがあり、少し書けるとのこと。

唐宝珍さん（94夏、81歳）。夏湾出身。てん足している。高銀仙さんの結拜姐妹の1人。娘のとき老同が3、4人いた。甘益、棠下、大路下に1人ずついて、一緒に女紅をしたり、遊んだりした。女文字は書かなかった。

結婚のとき、女文字を書いたハンカチ、タオル、三朝書をたくさんもらった。吃三朝<sup>(註9)</sup>のとき、男の側の年上の女性が、三朝書をみて歌った。歌の内容は、娘の母は、娘が婚家でいじめられると辛いから、娘に、婚家でよくふるまうよう、また、親の恩は忘れないように、と悟すものであった。

自分は読めないから結婚後も三朝書はほとんど見なかった。

50歳すぎから高銀仙さんと結交姉妹をした。姉妹になったときも、初めは書けなかった。一緒に歌は歌った。3～4年間、高銀仙さんに習って少し書けるようになった。

96夏再訪のとき、女文字を書いた小さなノートを見せてくれた。最近は何があるかと書いている。20年前夫が死んだとき、たいへん悲しかった。結拜姐妹の胡慈珠(注10)が女文字を書くことを勧めた。しかし、そのころは女文字は役に立たなかったから書かなかった。最近調査にくる人がいるので、書くようになった。90年ころ宮哲兵(注11)が、県庁のある町へ連れていって、高銀仙さんから習わせた。宮哲兵の提案の女文字の学校は計画だけで立ち消えになり、十分に習うことはできなかった。習うときは見本のノートがあり、それに従って書くという方法であった。

そのあとで、唐さんに文字を書いてももらったところ、辛うじて自分の名前が書ける程度であった。文字を書き連ねたノートは、周碩沂氏に見せたら、周さんいわく、「まちがいたらけで、書ける部類に入らない」とのことであった。

#### ⑧欧家村(96夏)

義海珠さん(64歳)。瑤族。高銀仙の養女。読むことも書くこともできない。

欧静鳳さん(35歳)。瑤族。高銀仙さんから習ったことがある。少しだけ覚えている。女文字で書いた梁山伯の本を持っていたが、弟に取りられてしまった。

#### ⑨樑馬村(96夏)

村の入口にいた女性に尋ねると、その人の母親(何柳珠、龍田村出身、88年に70歳で没)が、娘のころ読み書きできたという。亡くなったとき、女文字を書いたものは何も残されていなかった。

#### ⑩呼家村(96春、96夏)

高鳳仙さん(96春、78歳)。高銀仙の妹。高家村出身。漢族。7～8歳のとき女文字を村の未亡人から習って、以前は書いたが、今は書けない。読むことはできる。自分の伝記を陽煥宜に書いてもらって、それを見ながら歌うことはできる。陽煥宜と結拜姐妹だった。伝記の初めの部分は次のような内容であるという。

ひとり、部屋に座って考えます(注12)

自分のことを考えると大変悲しい

多分自分は前世に悪いことをしたのでしょう

きっと神さまに悪いことをしたのです

高鳳仙は自分のこしかたを述べます

親が自分を生んでくれました

この世は曇ってばかりで晴れたことがない……

三朝書は北京の学者が持って行ってまだ返してくれない。(96夏には、アメリカ人に1冊貸したとも言っている。遠藤注)

#### ⑩高家村(94夏、95夏)

蔣四女さん(94夏、76歳)。子どものころ、永州から逃げてくるとき、女文字を書いたものはすべて無くした。

Y・Cさん(94夏、60歳)甘益村出身、漢族。母からもらった三朝書を持っている。母が作ったものと思う。母がその母からもらったのかもしれない。母は消江郷(当時)白嶺崗村(現在玉齡村)出身。自分が14~15歳のとき40歳ぐらいで亡くなった。生きていたら90歳ぐらい。

三朝書は、自分が21~22歳のころ、母の遺品を整理していてみつけた。母が女文字を書いているところを見た記憶はない。母親のものだから役に立つと思ってしまっておいた。開けても読めないから、開けることは少なかった。

何美忠さん(95夏、78歳)。母が女文字をかいたものをたくさん持っていた。母は錦江村出身、漢族だった。

胡玉珠さん(95夏、61歳)。荆田村の実家で母が三朝書を2冊持っていた。母は去年死んだ。

#### ⑪上江墟(95夏)

何応華さん(49歳)。龍田村出身、甘益村在住。母・蒲英英さん(江永陳家街出身、3年前82歳で没)が書いていた。女文字を織り込んだ飾りのついたエプロンをもっていた。大路下村に楊淑梅さんという人がいて、女文

字ができるはず。

⑬土壠屋村（96夏）

村の入口の男性たちに尋ねると、口々に女文字はこの村にはない、という。70歳以上の女性もいないという。

⑭楊家村（陽煥宜さんの出身の村、95夏、96夏）

96夏、86歳の女性にきいたところ、女文字は習わなかった。父がどこでも使えないから習ってもしょうがないと言ったからとのこと。

唐華玉さん（95夏、61歳）。夏湾村出身。呼家村で女文字を見たことがある。自分も三朝書を年上の女性からもらって持っていたことがあるが、ねずみにかじられたので捨てた。

義潤華さん（95夏、48歳）。高銀仙の義理のおばあさんが母と仲よしだったので、高銀仙さんから白いハンカチをもらったことがある。また高銀仙さんに頼んで書いてもらったこともある。どこに置いたかわからない。

⑮銭塘村（96夏）

義青玉さん（67歳）。甘積頭村出身。女文字のものは何も持っていない。60歳以上の方はみな「読紙読扇」<sup>(註13)</sup>のことばは知っている。母が三朝書をもっていた。女文字を書いているのは見たことがなかった。陳秀青さんという新宅村出身で夏湾村へ嫁いだ人がよく書けた。

⑯浩塘村（96夏）

胡仙珠さん（73歳）。白水村出身。高銀仙さんと姻戚関係にあった。高銀仙さんの娘が結婚して、まもなく日本軍に殺された。その夫と自分が再婚した。高銀仙さんに頼んで女文字を書いてももらったことがある。

娘のころ、女文字は習わなかったが、三朝書は持っていた。実家の母がだれかに頼んで作ってもらったもの。女文字を刺繍したハンカチも白水出身の結拜姉妹の1人からもらって持っていた。しかし、それらは、日本軍が来たとき、山に逃げて、もどってきたら全部なくなっていた。

義年仔さん（78歳）。棠下村出身。娘のとき結拜姉妹から女文字を習った。その結拜姉妹はだれかに習って知っていた。今、歌えるが書けない。

⑰呉家村（96夏）

唐漢菊さん（79歳）。夏湾出身。女文字を書いたハンカチや三朝書を見たことがある。三朝書は持っていた。文字のない三朝書は作ったこともある。自分の持っていたのは甫尾に嫁いだ唐宝珍という友人からもらったものだった。2～3年前、河淵村の人がだれかに頼まれて買いに来て、2円で売った。

⑱神湾村（96夏）

村長に高齢の女性を紹介してほしいと頼んだら、村長は自分の母親が書けた、と話してくれた。呼盛宜さんといい、呼家村の出身で、てん足をしていた。数10年前に亡くなった。呼さんは娘のころ呼家村で女文字を習い、読むことも書くこともできた。三朝書を持っていたが、1964年の四清運動のとき、古いものだからよくないと焼き捨てた。

村で最も高齢の呼賢宜さん（呼家村出身）が女文字ができると思うと村長は言ったが、本人は不在で確認できなかった。

⑲棠美村（96夏）

義王娣さん（68歳）。大路下村出身。てん足をしている。自分ではできないが、大路下に書ける人がいて、娘のころ見たことはある。河淵村出身の何雲竹という人が書けたが、もう亡くなった。結婚式があると村人は何雲竹を呼んで歌ってもらった。自分も、母も書けなかった。村では何雲竹だけができた。

⑳達灘村（96夏）

村の入口で人々に聞いても、女文字のことを知っている人はだれもいなかった。高齢の女性を紹介してほしいと頼んでも、そういう人はいないと断られた。通りすがりの女性が女文字なら甫尾、桐口、河淵にあると教えてくれた。

㉑四脚門楼村（96夏）

何牛旺さん（30歳）。漢族。自分が15歳のころ、三朝書は焼き捨てた。価値がないと思ったから。お婆の盧金誼（達灘村出身）が女文字の読み書

きがよくできた。おばはいつも女紅をしていた。おばは出身がよく、子どものころ女文字を習ったと言っていた。女文字を刺繍した衣服や帽子を政府に寄付したことがある。4～5年前に亡くなった。

㊸三間舗村（96夏）

新しくできた村で、60歳以上の人はいない。女文字のことを知る人もいない。

㊹葛覃村（94夏、96夏、97春）

胡慈珠さんのいた村なので、たびたび訪ねている。

94夏に、陳桂秀さん（80歳）に尋ねたが、女文字のことは何も知らなかった。96夏でも胡慈珠さんが女文字ができたという村人数人に会ったが、現在読み書きできる人は1人もいないという。

97春。錦江村出身の50代の女性が河淵村出身の母からももらったという三朝書を持っていた。母は女文字の読み書きができた。

夏湾村出身の60代の女性。銭塘出身の母からももらった三朝書がある。母は生きていたら90歳以上。

潮水村から来ていた人が、潮水村にいる母が三朝書を持っている、という。

㊺倒水洞村（96夏）

呉雲池さん（80歳）。呉家村出身。12歳のころ、母・鄧金金と、兄嫁朱仙珠から習った。今は全く書けない。唐宝珍さん、胡慈珠さんらと結拜姐妹だった。

王幼菊さん（72歳）、娘のころできたが、今は全然覚えていない。

㊻嶺里村（96夏）

義社圭さん（87歳）。義年華さんといとこ同士。おば・王路仙から、義年華さんと一緒に習った。義年華さんは4歳年上でたくさん習ったが、おばが亡くなって自分は十分習えなかった。習ったあとでもあまり使わなかった。習うときは1句ずつ歌って書き、また1句歌って書き、を繰り返した。毛筆で書いて習った。5人も弟妹がいて世話をしなければならず、習った

あと復習はできなかった。当時村で習ったのは2人だけ。

義年華さんはとてもきれいな文字を書いていた。甘益村にいる先夫に女文字の手紙を書いて送っていた。

三朝書は宮哲兵が来て何冊か持っていた。

㊸棠下村（96夏）

王甫仙さん（74歳）。白水村出身。自分ではできないが、孫娘が義年華さんから習ったことがある。

盧全宜さん（76歳）。達灘村出身。女文字は知らない。自分がこの村に嫁いできたとき、村に女文字の書ける人はいなかった。

㊹夏湾村（96夏、97春）

義雲月さん（76歳）。棠下村出身。自分は習わなかったが、棠下にいるとき楊仙というできる人がいた。楊仙がハンカチやノートに書いているのを見たことがある。彼女は歌いながら書いていた。

扇子やハンカチ、三朝書ももらって持っていたが、今はもうない。

胡美月さん（高銀仙さんの孫、34歳）。85年、23歳のときから祖母に習うようになった。歌を全部覚えてから、書くのを習った。歌った部分の意味を聞き、女文字を書き、漢字をつけた。難しさは女文字も漢字も同じくらいだった。

祖母は、83年以降、学者たちが調査にくるようになる前もよく書いていた。結拜姐妹と友情を深めるため、互いに慰めるために書いて、やりとりをしていた。紙やハンカチに書いていた。そのころ、自分は女文字がどんなものか知らなくて何も考えたことがなかった。

85年に習おうと思ったのは、祖母が高齢で亡くなったら、女文字が消えてしまうと気がついたから。母は身体が弱く、習う余裕はなかった。自分は、そのころ結婚して時間がなくなり、十分に習えなかった。

胡慈珠さんの作った「女書の歌」は少し書けるが、思っていることが書ける段階ではない。

㊺甘積頭村（96夏）



女文字のコピーを見せて尋ねても女文字について知っている人はひとりもいなかった。

㉘ 朱家湾村 (96夏)

高齢の女性3人に尋ねたが、家が貧乏で習うことはなかった、とだけ。漢字を織り込んだ花帯<sup>(註16)</sup>を持っている人はいた。

㉙ 興福村 (義早早さんが住んでいて、陽煥宜さんが習いに通った村、94夏)

村の入口で米を干していた朱積成さん(44歳・男性)に尋ねる。母(瑤族)が書けたが去年死んだ。他に書ける人はいない。60年代に、女の人たちが集まって歌うのを聞いたことがある。そのころ、歌ってはいけないとされていたが。

義早早さんについて、各村の人々から聞いた話をまとめると以下のようになる。

錦江村の何建雪さん(95夏、65歳)は、姉が結婚するとき、義早早に書いてもらった。そのころ30歳を越したころで、たくさん書いて忙しそうだった。1枚のハンカチを書いてもらおうと銅銭2個を払った。同村の蔣京亮さん(96夏、64歳)の話では、義早早さんは夫の遺産をめぐる村で裁判をしたことがある、という。その裁判について、甘益村の何桂芳さん(96夏、55歳)は、義早早はその訴状を女文字で書いた、県知事は何が書いてあるかわからないから却下しようとした。県知事夫人が女文字だとわかってとり上げることになった、という。

新書房村の朱煥池さんは、この裁判は夫の死後、親戚に家を奪われそうになっておこしたのだという。朱さんの父親が漢字がわかるから義早早が相談に来ていた。それを女文字で書いて、上着の裾に入れて法廷に入り、それを法廷で読み上げていた、という。

義早早さんの裁判の話はあちこちの村で聞いたが、女文字で裁判を闘った稀有な例であろう。

㉚ 錦江村 (95夏、96夏)

何建雪さん(95夏、65歳)河淵村出身、てん足していた。

三朝書は結婚するとき、たくさんもらった。結拜姐妹が7人いた。みな河淵村の娘で、2歳のとき母が決めた「姉妹」だった。7人とも女文字は書けなかったが、おばさん（桐口出身）に書いてもらったのを交換した。解放後、役に立たないと思って捨てた。

姉が結婚するとき、義早早に書いてもらった。義早早は30歳以上の年で、たくさん注文に応じて書いていて忙しかった。

娘々廟へも詣った。女文字を書いた扇子をもらってきた。その扇子は翌日家で焼いた。行くときは、扇子を買って書いてもらい、それを奉納してきた。

吃三朝のとき、男の側の女性が女文字を書いた扇子などを見せて歌った。結婚するときハンカチや扇子をもらわない娘は、男の家の側から軽蔑された。

何静淑さん（96夏、66歳）。河淵村出身。陽煥宜さんと親戚。扇子と三朝書を持っていたが、文革のとき燃やした。女文字は習ったことがないが、花帯は胡四四<sup>(注14)</sup>に習って作ったことがある。

60代の男性。母親の残した三朝書を持っている。母が嫁に来るとき持ってきたもの。母は甘益出身で瑤族だった。母が書くのをみたことはない。母は義雲女と言い79年に84歳で亡くなった。義早早の妹。母の妹に義三三がいて、黄甲嶺鎮に嫁いたが、文革のとき自殺した。

母の姉妹は3人とも女文字ができたが、母の家は特に豊かでも教養が高くもなく、ごく一般の水準だった。

いとこの母の残した文字のない三朝書があるというのでいとこの妻に尋ねると、姑は10年前に70歳で亡くなった。亡くなったとき遺品の中に2～3枚のハンカチと三朝書があったが、用がないから燃やした、とのこと。

欧進英さん（96夏、65歳）。下新屋村出身。解放前、女文字を織り込んだ花帯を持っていたが日本軍に奪われた。現在は何艶新さんに文字の手本を書いてもらって、それを見ながら織ることができる。

### ㊦甘益村（96夏）

周佩珍さん（74歳）。自分ではできない。義年華さんが結婚後しばらく公益に住んでいたのだから彼女を知っている。女文字のことは「蚊文字」ともいう。

㊸楊家巡村（90夏、97春）

義室芳さん（97春、53歳）。大路下村出身。瑤族。母（唐玉葵・夏湾出身）が三朝書を持っていたが、今はない。母は女文字が読めたが書けなかった。20年前50歳で亡くなった。

この村は96夏も訪ねているが、そのときも漢字の入った花帯をもつ人に会えただけだった。

㊹大路下村（96夏）

案内してくれた中学教師が、自分の祖母（楊家村在住）が90歳で女文字の読み書きができるという。楊家村へ行き確認したところ、その女性はいしたが、できないことが判明。

楊喜梅さん（86歳）。白水村出身。瑤族。12歳まで学校へ行き、漢字を習った。学校をやめてから女文字を習った。義年華から棠下村で習った。三朝書や花帯を持っていたが、文革のとき、持って行かれた。

㊺楼下村（96夏）

婦女主任<sup>(註15)</sup>の話では、この村には女文字のできる人はいない。龍田村にできる人がいたが4～5年前に亡くなった。

㊻龍田村（96夏）

唐梅芝さん（49歳）夏湾出身。瑤族。女文字が読める。7歳のころおば（父の妹）の唐淑女から習った。今も10字ぐらいなら書ける、というので、名前を書いてもらおうとしたが、漢字を斜めにしただけで、女文字ではなかった。

唐さんのおばさんは大路下出身の祖母から習った。おばさんには女の子がいなかったので、自分に教えたがった。学校から帰ると、外で遊ばないで家にいなさいと言って家の中で教えた。夜も教えた。1文字1文字読み方を教えて、<sup>(註16)</sup>次に書き方を教えた。また、歌を1句歌って、それを書

いて教えた。数年間習った。学校に行きながら習った。漢字より女文字の方が難しかった。

漢字と女文字を同じ時期に習ったが、混乱することはなかった。女文字は斜めに書くから。女文字で考えたこと何でも書けた。村の「姉妹」に女文字のハンカチを書いて贈ったこともある。10何歳まで習った。小学校で他に習っている人はいなかった。女文字を習うのは興味があった。おばは、必要なことがあるかもしれないから覚えなさい、と言った。

しかし、50年代の終わりのころ、古いものは悪いと言われるので習うのをやめた。その後40年書かないからすっかり忘れた。

おばは3人の結拜姐妹の1人だった。3人とも女文字ができた。彼女たちは漢字はできなかった。おばはてん足をしていた。家の中で歌ったり、刺繡、衣服、刺繡の鞋などを作ったりしていた。

#### ㊦宅下村（96夏）

H・Sさん（66歳）。江河村出身。漢族。実家に帰ったときおばに習ったことがある。短い時間だったのであまりできなかった。三朝書を一冊もっているが、兄のところに置いてある。

M・Yさん（79歳）。黄甲嶺村出身。漢族。女文字はできない。嫁ぐとき親戚からもらった三朝書がある、切り紙が得意で、今はそれをはさむために役立てている。

#### ㊧潮水村（97春）

蔣清玉さん（60歳）。白馬村出身。字のない三朝書を持っている。字を書いたのもあったが、役に立たないから焼いた。

ある男性が、允山の榕欄金が女文字ができるかもしれない、と教えてくれた。

### 2-2 銅山嶺農場

#### ①銅山嶺農場（93夏、94夏、95夏、96春、96夏、97春）

陽煥宜さん（97春、88歳）。楊家村出身。陽さんについては、趙麗明（19

92)、遠藤(1993、1994 a. b、1995 a. b. c、1996 a. b. c)に報告があるので97春の聞き取り調査だけ報告する。4月30日訪ねたときは、病後でいつもの元気な声は聞かれなかった。陽さんによると、1月23日、風邪から熱が出て意識がなくなった。翌朝医者に来てもらい点滴した。2月4日ごろ起きられるようになった。心臓が苦しく、どきどきする。呼吸困難になることもある。現在も食欲あまりなく、粥や豆腐のようなものだけ食べる。毎日寝たり起きたりで何もしていない。病気の後女文字は書いていない。視力が弱くなり、目を使うと涙が出てくるから書けない。

翌5月1日再訪したときは、かなり元気に見えて、2行ほど書いて歌ってくれた。歌声にもはりがあった。娘のころのことについても答えてくれた。

娘のころ、習ったのは人が書けるのをみて書きたいと思ったから。母方のおばが書けた。村では2人だけ書けた。義早早の家まで5里(2.5km)歩いて通った。陽樂樂と一緒に習った。1人だと高いが、2人だと1人400文払えばよかった。大勢一緒では効果が少ないから2人でよかった。

16~17歳のころはたくさん書いた。普通の歌も書いたが、三朝書も書いた。三朝書はあげる相手のほめことばを書いた。

結婚後は書かなかった。書いてもしようがないから書かなかった。再開したのは趙麗明が調査にくるようになってから。

自分が死んだら困ると思って、病気になる前、たくさん扇子に書いた。大きい扇子に書くのに2日ぐらいかかる。絹の布は3日かかった。

中学校の教師をしている、孫の嫁に、学校が休みのとき教えている。歌を教えて、書く。それを見て嫁が書く。彼女は表を文字、裏は漢字の扇子を1本書いたことがある。彼女は覚えてもしようがないと言っている。

②河淵村(陽煥宜さんの友だちがいるし、何艶新さんもいるので、93夏以来6回とも訪ねている)

胡四四、朱雲娣さんについて遠藤(1996)に、何艶新さんについて遠藤(1994 b、1995 a. c、1996 a. b. c)に報告している。ここでは96夏以降

について報告する。

何艶新さん（96夏、56歳）。田広洞村出身。瑤族。ことし5月趙麗明が、陽煥宜を家へ連れてきた。陽は、わたしの字は正しくない、間違っていると言った。自分は陽より文字の水準が低い。しかし、陽の字で間違っているものもある。陽は「言」の字を「𠄎」と書いているが、本来の字は「𠄎」だし「冷」の字を「𠄎」と書いているが、本来の字は「𠄎」のはず。

女文字では、1つの音が多く文字で表わされる。全くの同音でなくても同字になっているものもある。習ったときの先生によって厳密に音を区別する人とややぼける人とがある。「ノ」と「𠄎」はどちらも全く同じで「一」を表わしている。適当に両方を使っているが、使い分けはしていない。

祖母は上江墟出身で漢族。祖母は漢字も読めた。祖母は他の人と一緒によく女文字を書いていた。三朝書を書くとき涙が出る、と言っていた。三朝書は悲しいことを書くからと。祖母は亡くなる前三朝書を4冊くれた。いらないと思って亡くなったとき一緒に燃やした。祖母から女文字の伝説をきいたことがある。荆田の娘が皇帝に召されて9年も戻れなかった。その貴妃が家へ手紙を書くときに女文字を作った。1人で作った。それを代々伝えてきた、という話であった。

## 2-2 黄甲嶺鎮

### ①莫家湾村（96夏、97春）

50代女性。谷母溪村出身の母の残した三朝書がある。母は女文字は書けなかった。舅が女文字ができた。舅はインテリだった。葛覃にいる娘のどころにも三朝書がある。

### ②何家宅村（96夏）

王柳珠さん（76歳）鳳田村出身。漢族。16～17歳のとき、河淵村出身の人から、友だちの何娥篇と一緒に習った。自分はマスターできなかったが、何娥篇は、桐口の人と同じくらい（義年華さんのことと思われる。遠藤

注) 上手だった。村では湾頭から嫁いできた人と何と2人だけできた。2人とも亡くなった。

自分が図案を描き、何が女文字を書いた美しい扇子を持っていた。結婚のときハンカチをたくさんもらったし、三朝書も持っていた。工作隊が来たとき持って行かれた。

王さんが筆で描いたという刺繍の図案をみせてくれた。美しい花と蝶の精細な図案で、中に「永・結・同・心」の漢文もあった。結婚の祝いに使うことばだということとであった。

王さん宅まで案内してくれた人の母親も、王さんからももらったハンカチを古いものは危いと思って工作隊に出したという。

王さんの夫(73歳)の話では、自分が結婚したころ、村に女文字はなかったとのこと。

### ③石橋頭村(96夏)

村人のだれに尋ねても、女文字は見たことがないと言われてとりつく島もなかった。

### ④龍洋村(96夏、97春)

村の書記に古老を紹介してほしいと頼んだところ、女文字調査に来た人は今までいなかったと言い、村の最長老の家に案内してくれた。

莫蘭色さん(96夏、92歳)。龍母致村出身。習ったことがある。父から友人と一緒に習った。父は女文字を教えることができた。自分は今は書けない。夫の妹、盧桂色(龍洋出身で甘益に嫁いだ)が書けた。文字のない三朝書を持っている。結婚する前に自分で作った。糸をはさむのに使った。みんなが作っていたから自分も作った。

歐陽煥砂さん(97春、85歳)。石齡村出身。瑤族。字の書いてない三朝書を持っている。結婚するとき母にもらった。刺繍用の糸をはさむために使ってきた。文字は習ったことがあるが、すっかり忘れた。

田広洞村出身の70代の女性。家は葛覃だが、娘の嫁ぎ先に来ている。家に三朝書を1冊持っている。母の何西竹からもらった。

莫家湾出身の70代の女性。母の残した三朝書を持っている。母は何書来といい、嶺里の出身だったが自分が50歳のとき73歳で亡くなった。だれが作ったものかわからない。はさんでいる刺繍は姑媽や自分が作った。

⑤鳳田村（96夏）

王芳さん（25歳）。祖母、義池宜（湾頭出身、94年87歳で没）ができた。

⑥龍会村（96夏、97春）

96夏、錦江村の男性からきいた、彼の母の妹で文革中に自殺したという義三三さんのことを聞くため、義さんの甥何福德さんを訪ねた。

何福德さんに弟が1人いて、零陵で働いていた。弟が銃を持ち帰ったと噂が立ち郷政府がその銃を没収に来た。弟は知らないと言った。何福德さんの父、弟、その妻の3人が郷政府に呼ばれ罰せられた。義三三にも銃を隠している疑いがかけられた。義三三は女文字が好きで家のあちこちに隠していた。家を搜索した郷政府は1かごの女文字資料も没収した。72歳の義三三に72斤の米をもってこいと政府は命令した。彼女は、古いものを持っているのを知られてしまい、追及されるのをおそれて自殺した。

何福德さんの妻が、義三三の遺品を何か持っているかもしれない、というので97春再訪したが、その妻には会えず確認できなかった。

⑦黄泥舖村（96夏）

解放後、他の村から寄り集まってできた村で、60歳以上の人はいない。女文字に関する情報は何も得られなかった。

⑧西村（97春）

村の最長老を訪ねたら、O・Tさんが女文字のものを持っていると教えてくれ、その家を訪ねた。O・Tさん（62歳）、鳳田出身。三朝書を持っている。9枚に文字が書いてあり（普通は3枚）、天地を逆にして綴じた紙が3枚ある。書き手が異なる人のものを合わせたようである。王さんは祖母（湾頭出身で鳳田に嫁いだ）からもらった。祖母の結拜姐妹が銅山嶺にいる。

⑨杏菊村（95夏、96春、97春）



盧閏池さんとの最初の出会いのことは遠藤（1996 a）に記した。その後96春再訪のとき、盧さんは目がほとんど見えないと言って読んでくれなかった。息子に先立たれ、一緒にいた息子の妻も孫たちも、町へ行ってしまう、毎日泣き暮していて、目が見えなくなった、と言った。95夏、生き生きと女文字を拾い読みし大声で歌ってくれたし、確かに娘のころ書いていたというので、思い出してくれるよう見本やノート、サインペンを渡して帰国したので、その後文字力がどのくらい回復しているか大きな期待をもって再訪したのだったが、彼女の現実は、文字どころではなかった。1人暮らしで自分が食べるものを手に入れるのがやっとの厳しい生活に、女文字の入り込む余地はなかったようだ。

97春、三度目に訪ねたとき、盧さんは目もよくなり、持参した見本をすらすらと読んでくれた。生活も少し安定してきたのだろう。読む力を回復した後、書く力まで呼び戻せるかどうか、今後も見守っていたい。

#### ⑩上白馬村（96夏）

河淵村出身の60代の女性。瑤族。母親からもらった三朝書を持っている。母も河淵村出身。母は何冊も持っていた。生きていたとしたら84歳。2冊残っていたが、1冊は以前、宅下村の人に売った。

莫冬珠さん（68歳）。龍母致出身。瑤族。1冊持っていたが今はない。

#### ⑪下白馬村

何六六さん（80歳）。龍田村出身。娘のころ三朝書を見たことがある。結婚するとき結拜姐妹から1冊もらった。今どこにあるかわからない。歌は今も歌える。

歐陽水妮さん（65歳）。石齡出身。文字のない三朝書を持っている。去年90歳で亡くなった母が持っていたもの。

#### ⑫谷母溪村（96夏）

案内してくれた鎮の民政局の役人の話で、允山鎮に住んでいる江永県最高齢108歳の歐陽さん（名前不明）が、女文字を読み書きでき、歌も歌える、という。県の旅游局局長陳国森さんに尋ねても、そのような高齢の女

性は県にいない、というので確認していない。

⑬ 陸下井村（97春）

歐陽更換さん（47歳）。陸下井出身。龍会出身で79年に63歳で没した母の三朝書が1冊あった。字が書いてあったが母が作ったものかどうかわからない。今どこにあるかわからない。漢字を織り込んだ花帯を作ったことがある。東方紅の歌を織り込み、73年ごろ作った。

歐陽解居さん（42歳）陸下井出身。古石村出身の母の残した三朝書が1冊あった。今見当たらない。

⑭ 黄甲嶺村（96夏）

蔣正奎さん（81歳）。白馬村出身。瑤族。娘のころ習ったことがある。いとこが習っていたので一緒に習った。習ったが、役に立たなくて使わないから全部忘れてしまった。いとこの何幼池は読むことも書くこともできず、三朝書も持っていたが2年前に亡くなった。

⑮ 十甲村

龍母致村出身の70代女性。瑤族。三朝書を3冊持っている。2冊は文字がなく刺繍の糸と図案の紙がはさんである。字が書いてあるのは母にももらった。母がどこから手に入れたかわからない。母は書けなかった。自分は文字は読めないが歌は歌える。歌は娘のとき母から聞いて自然に覚えた、若いとき母がよく歌っていたから。

⑯ 一甲村（97春）

盧国生さん（70歳）。谷母溪村出身。瑤族。夫の歐陽善卓が三朝書を持っていた。夫は教師だから持っていたと思う。今どこにあるかわからない。

盧さんの母親は谷母溪出身で何十年も前に亡くなったが、読むことも書くこともできた、という。

⑰ 龍母致村（97春）

村人が歐陽宝書さん（72歳）が三朝書を持っているというので確認のため訪ねたら、本人は不在だったが、夫がもう焼いてしまったと話した。

#### 1-4 瀧埔鎮

##### ①新書房村（96春）

義池珠さん（77歳）。上江墟出身。女文字は読めない。娘のころ「読紙読扇」をみたことがある。書いている人を見たこともある。とても習いたかったが、小さいころ母に死に別れて家事を1人でやっていたから文字を習う余裕はなかった。

朱煥池さん（75歳）。興福村出身。学校に上がる前、村で「読紙読扇」するのをみたことがある。歌をきいているととてもきれいだ、意味はわからなかった。手紙のように書いたものを見たことはある。

難しそうだったから習おうと思わなかった。女の人で学校へ行かない人だけ習った。頭のいい人だけ覚えられた。頭の悪い人には無理。おぼのなんとか最早という人がよく書いていた。扇子に書いていた。

##### ②江河村（96夏）

義年華さんの孫娘。習わなかった。この村に義年華さんが住んだことがあり、調査の人が来るようになってよく書いていた。

##### ③白水村（96夏）

王小妹さん（82歳）。白水村出身。漢族。女文字を見たことがある。根気があるから自分は習わなかった。嫁ぐときに親戚からもらった三朝書を持っていたが、自分で読めないから捨てた。このあたりでは三朝書より「送礼書」という方が普通。

##### ④黄家村（96夏）

黄桂福さん（60歳、男性）、白水全村にもう女文字のできる人はいない。何西静という江河出身の女性が読むことができたが2年前に80歳で亡くなった。書いているのを見たことはない。村にこの人以外でできる人はいなかった。

解放前、結婚式などで書いているのを見たことがある。他の村から書ける人を呼んで書いてもらっていた。結婚する人の家の人が書いてほしい内容を言って、お金を払って書いてもらっていた。子どものとき歌もよく聞

いたが、いい歌だった。

⑤周家村（96夏）

だれも女文字について知っている人はいないと村人の話。

⑥扶塘村（97春）

むかし見たことがある人、漢字の入った花帯を作れる人がいだけ。

⑦圳景村（97春）

盧信仔さん（59歳）。圳景出身。瑤族。母李珠々の三朝書を持っていたが、今30歳になる子どもが小さいとき、トイレの紙に使ってしまった。結婚するときの花嫁衣裳として自分で作った刺繍の肩かけを見せてくれた。

何漢仔さん（70歳以上）漢族。龍会出身の母親の三朝書があったが、いつ捨てたか忘れた。母が娘のころはたくさんあった。

花帯も持っていたが、1944年日本軍が侵略したとき、いい衣服をその花帯で縛って持って行った（そのとき自分は黄泥舖にいた）。二階へ大事なものを隠して、山奥に逃げて戻ってきたら何もなくなっていた。1カ月以上隠れていた。日本軍は40日以上駐在し、殺された人もたくさんいた。娘を探して断わったり、抵抗したりすると殺された。鶏、牛、豚もすっかり持って行かれた。

⑧利田村（97春）

周龍色さん（78歳）。塘背村出身。むかし見ただけ。

以上が江永県の3鎮と農場の中の村々でこれまでに足を踏み入れた所の状況である。道県、江華県についても一部は調査しているが、今回は省略した。

これまでの調査でわかったことをまとめると次の6点になる。

- ①女文字の伝承者といえるだけの文字力をもっているのは陽煥宜、何艶新の2人だけである。
- ②後継者育成の試みもなされたし、祖母から習った孫もいるが、伝承で  
きる力はない。

- ③三朝書などの文字資料はまだ残っている可能性がある。
- ④上江墟鎮が中心で、そこで育った人が周辺に散ったとされるが、黄甲嶺鎮でも書いていた人がいた。
- ⑤解放後漢字を学ぶようになり、女文字は習われなくなったとされるが、50年代後半にも習った人がいた。
- ⑥三朝書の体裁で、イラスト集のようなものも作られていた。

付記 97年の調査は、平成9年度科学研究費補助金「国際学術研究」によって行っている。

(注記)

- 注1 アメリカ、アイオワ大学の Cathy Silber “From Daughter to Daughter-in-Law in the Women’s Script of Southern Hunan” (『Engendering China』Harvard Univ. Press 1994) に、義年華と一緒に任んだことが書かれている。
- 注2 学習班で習った盧蘭珠さんの話では1期3ヵ月だったという。
- 注3 文献①、②など。
- 注4 上江墟あたりでは死者は土葬されるが、葬るとき、家の門の前で、死者が生前愛用していた身の回りの品を一緒に焼く風習がある。
- 注5 徳のあった女性を祀る廟。毎月1日、25日など廟の祭りの日に娘たちが詣った。
- 注6 結拜姐妹で、同年齢の義姉妹のこと。
- 注7 刺繡、織物、縫物、布鞋作りなど、従来の女性たちの手仕事の総称。
- 注8 この地の女性たちが、かつて子どもを背負ったり、体を縛ったりするのに使った帯。女文字を織り込んで作ったものがある。
- 注9 結婚3日目、実家から婚家に料理、食べ物を届け、親戚の者たちが一緒に食事をする事。
- 注10 周碩沂さんが50年代、女文字の調査研究を始めたときの、有力なインフォーマントとして、周碩沂さんに女文字資料を提供し、女文字を教えた。
- 注11 宮哲兵、中南民族学院政治系副教授。1982年、現地へ民族調査に訪れ、女文字の存在を知った。周碩沂さんに同行を求めて資料の収集をし、「关于一種特殊文字的調查報告」(『中南民族学院学報1983年第3期』)の論文にまとめた。これが、中央に女文字の存在を伝えた最初の論文となった。
- 注12 三朝書の書き出しの句としてこの表現はよく使われる。

- 注13 女文字を書いた紙や扇子を読んで歌うこと。
- 注14 荆田出身で河澗村に住んでいたが95年没。女文字を織り込んだ花帯が織れた。
- 注15 村長、書記の下の村の役人の1人。1人っ子政策推進のために各村に配置されている。
- 注16 文字を1つずつ読み方を教えた、という教え方は、今までの習った人の話には出てこなかった。

(文献)

- ① 謝志民『江永女書之謎』(河南人民出版社、1991)
- ② 趙麗明『中国女書集成』(清華大学出版社、1992)
- ③ 遠藤織枝「中国女文字紹介」(『ことば14号』現代日本語研究会、1992)
- 〃 「中国の『女文字』発掘」(『総合ジャーナリズム研究』(春)、総合ジャーナリズム研究所、1994 a)
  - 〃 「中国女文字調査報告」(『ことば15号』1994 b)
  - 〃 「94夏湖南省女文字現地調査報告」(『文学部紀要』9-1、文教大学文学部、1995 a)
  - 〃 「女性と文字」(『女と男の時空、日本史再考 I』藤原書店、1995 b)
  - 〃 「95年中国女文字調査報告」(『ことば16号』1995 c)
  - 〃 「96春中国女文字現地調査報告」(『文学部紀要』10-1、文教大学文学部、1996 b)
  - 〃 『中国の女文字 一伝承する中国女性一』(三一書房、1996 a)
  - 〃 「96年中国女文字調査報告」(『ことば17号』1996 c)